

巻頭言

スラムダンク

久々に「スラムダンク」全31巻を読み返してみた。スポーツ物にありがちな友情や恋愛のプロットも始めのうちはあるのだが、だんだんと片隅に追いやられ、読む側も、そんなことはだんだんとどうでもよくなり、しまいには試合の勝ち負けすらもどうでもよくなってくる。そこにあるのは、ひたすらストイックに「バスケやりてー」だけ。それで全31巻、押し通す筆者の力技に改めて驚くとともに、ストイックな思いというものが、どれだけ魅力あふれるものなのかということのを再認識した。

われわれ科学者も(本来は)「研究やりてー」で生きているようなところがある。遊びの旅行で楽しんでいても、盆正月でリラックスしていても、4～5日も研究から離れると、研究に飢えることは科学者なら誰しも経験したことであろう。同じコンピュータに向かっていても、事務書類を作っているときはひたすら消耗するけれど、コンピュータ・プログラムを作っていたり、論文を書いていると夢中になって時を忘れる。

考えてみると、研究もスポーツみたいなものだ。華麗なプレイで軽やかに問題を解決できたときはすかっとするし、泥臭くデータを積み重ねて解決というのもしぶい。どうしても解決できない場合は、こういう方向では解決できないと宣言して、ドローにもちこむこともある。華麗なプレーでもそれを支えるのは、もちろん地道に習得した基礎知識、基礎テクニックや経験。ルールは万国共通の論理構造。そして勝負の最終的な決め手は、どうしても解きたい、どうしても知りたいという気持ちがどれだけ強いかがだったりする。

スポーツを極めていった先に見えるものは僕にはわからないが、科学研究の成果というものははっきりしている。それは、知りたいという自分の、人類の根源的欲望に一步ずつ答えていくことであろう。その科学的成果というものは形が見えやすいため、科学においては、その最終的に見えたもののみが一般の人に伝えられ、そのプロセスや「研究やりてー」というストイックな思いは伝えられていなかったように思う。成果をわかりやすく噛み砕いて説明して啓蒙し、あげるといふ態度だけでは、科学の魅力を本質的には伝えきることができないのではないか。ましてや、最近幅を利かせている、それが社会にいかに関与するか(正確には、いかに役立つかのように見えるか)という妙な実利的価値判断のもとに、成果を伝えることは、かえって科学の魅力を損なってしまうのではないか。

もちろん、ストイックな思いだけは、暮らしていけないのはわかっている。しかし、あまりにもそれはとはかけ離れたことを要求される今日この頃、ストイックな「研究やりてー」を大切にしていきたいと思っている。それは十分に価値があり、魅力溢れるものであるはずだから。

井田 茂(東京工業大学・教授)